



Title	コナトウスから救済へ：スピノザにおける救済の根底的基礎としてのコナトウスについて
Author(s)	河村, 厚
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1997, 31, p. 27-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4640
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コナトゥスから救済へ

—スピノザにおける救済の根底的基礎としてのコナトゥスについて—

河 村 厚

スピノザ哲学が究極に目指すのは救済 (salus) である。私は、彼の主要三著作つまり『エチカ』、『政治論』そして『神学政治論』が目指した救済をそれぞれ哲学的救済、政治的救済、宗教的救済と規定し、コナトゥス＝自然権をこれら三つの救済の根底を一貫して流れる通奏低音として捉える。本論では、このコナトゥスの存在論的基底を照らし出すと共に、様々な位相において現れた〈限りにおけるコナトゥス (conatus quatenus)〉は上昇し得る（大きくなる）ことを確認する。というのも、コナトゥスはあくまで神から「与えられた本質」であるから、有限様態としての人間においては、小さくはなっても大きくはならないし、人間にはコナトゥスを大きくすることなど不可能であるとするならば、救済の生じる可能性は局限されてしまうからである。そこで本論では、コナトゥスを救済が生じる場として捉えることで、スピノザにおける救済の最初の基礎を提示したい。

I コナトゥスの存在論的基底

『エチカ』でコナトゥス (conatus) という概念が最初に登場するのは、第3部の感情論に入ってからである。そこで、ここではまず第3部でのスピノザの有名なコナトゥスの定理を示して、それを分析してみる。

- (1) 「各々のものは、それ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努力する (perseverare conatur)。」 (III/6)

- (2) 「なぜなら、個物は、それによって神の属性がある一定の仕方で表現される (exprimuntur) 様態である (第1部定理25系により)、言い換えると、それは (第1部定理34により) 神が存在し又活動するその神の力を、ある一定の仕方で表現するもの (res) である。」 (III/6D)
- (3) 「各々のものが、それによって (quo) 自己の存在に固執しようと努力するコナトゥスはそのもの自身の現実的本質に他ならない。」 (III/7)
- スピノザはコナトゥスを、人間も含めた万物（様態）が自己の存在に固執しようとする努力（傾向）として規定している。このコナトゥスには<自己保存、万物に共通の本質、神の無限の力の表現>といった性質が付与されている。通常、コナトゥスはこの第3部定理6と7から登場するとされる。しかし、コナトゥスがスピノザの感情理論、政治理論、倫理学説の出発点だとしても、その出発点は『エチカ』の先行する二つの部の成果そのものであるから、更に第1部まで遡って、コナトゥスの存在論的基底を探り当てたい。まず、上述の(1)～(3)における「各々のもの」つまり様態としての個物は、そもそもどのようなものとして定義されているかを考察する。
- (4) 「様態 (modus) とは、実体の変状 (affectio) つまり他のもののうちに在り、他のものによって考えられるものと理解する。」 (I/D5)
- この(4)における「他のもの」とは当然、実体 (substantia) である (I/15・D)。個物としての（有限）様態は、実体のようには、それ自身で存在することも考えられることもできない。それは、存在する（し始める）為に既に他のもの (=実体=神=絶対に無限なる実有) (I/D6, 11・S) の存在を前提にしているのだ。そして、上述の(2)に示したように、<個物は、神の属性 (attributum) を一定の仕方で表現する様態 (I/25C) である>。ここで、属性とは「知性が実体についてその本質を構成していると知覚するもの」 (I/D4) であるから、これは<存在する全てのものは神の本質を

一定の仕方で表現する様態である>と読み換えられる(I/36D)。更に、神においては、その存在と本質と力能は同一であるから(I/20,34)、<存在する全てのもの(様態)は、神の本質=存在=力能を一定の仕方で表現する>ということになる。これは、コナトゥスが有限様態としての個物のうちで、分離された——というより失われた——存在と本質の統一を回復させるということである。そしてこれこそが、上述(2)にコナトゥスの根拠(証明)として挙げられた、個物による「神が存在し、活動するその力能の」表現ということの意味なのだ。スピノザによると自己原因(*causa sui*)である実体(神)のみが、その本質が存在を含むもの、つまり、存在するしか考えられないものである(I/D1, 7D, 11)。これに対して有限様態としての個物の本質は存在を含まない(I/24)。では、このような個物はいかにして存在可能なのか。それは唯、神の無限なる力をコナトゥスによって表現することによってのみである。万物が自己保存の努力としてのコナトゥスを有することの証明(上述(2))に、万物が神の力能を表現することが挙げられていることがこれを端的に示している。この「表現する」という概念は、コナトゥスを考える上で決定的に重要である。人間を含めた有限様態は自己の現実的本質であるコナトゥスによって神の力能を表現する限りにおいて(IV/4D)¹⁾、神の力能(=存在=本質)を享受して、初めて現実的に存在し、何かを為したり、為そうと努力したり(*agit, vel agere conatur*)つまり活動することができるのだ(III/7D)。これは、このような「表現」を行わない限り、有限様態は「たとえ存在していても、我々がそれを存在しないものとして考えることができ」、その様態の過去や未来の存在も確証できない(I/24C, EP/12)ということなのだ。これがコナトゥスが有限様態の現実的本質つまり(神から)「与えられた本質(*essentia data*)」である(III/7D)ということの意味である。有限様態としての各個物が存在し始め、存在に固執する原因はあくまで神であり(I/24C)、各個

物は「他の個物から一定の仕方で存在するように決定されているとはいえ」(II/45S, cf. I/28)、その「他の個物」でさえ、実は有限な様態的変状に様態化した〈限りにおける神 (Deus quatenus)〉であること(I/28D)を直観知によって見抜けば(V/24, 25D, 36S)、「各個物がそれによって存在に固執する力はやはり神の本性の永遠なる必然性から生じる」(II/45S)ということは一目瞭然なのだ。

このように、「表現する」ことによって、有限様態としての個物は、「絶対に無限なる実有」としての神(実体)と繋がっているのだが、この繋がりは、初めから二つに分かれている無限なものと有限なものを個物のコナトゥスが媒介になって、神の本質を表現することによって結合させて生まれるのではない。実は、無限なもの(実体)と有限なもの(様態)は初めから繋がっているのだ。というのも、スピノザの神は超越神ではないからだ。スピノザの神は万物の超越的原因ではなく内在的原因(*causa immanens*)であり、様態としての万物は全て神のうちにあり、神なしには存在することも考えられることもできない。神は、神自身のうちに存在する全てのものの原因なのだ(I/15・18, EP/73)。私が先に「本質と存在の統一の回復」という表現で意味したのはまさにこのことである。そして、彼独特のこの汎神論的内在神論によって初めて、有限なもの(様態)が、無限なもの(実体)を表現することと有限様態としての各個物が、コナトゥスによって無限なる神(実体)と繋がっているということが可能になる。ここに、有限様態としての人間と無限なるものとしての神との繋がりも現れるわけであるが、この「神あるいは自然」(E/N/Pr)と人間とが繋がっていることを、スピノザは別の表現で「人間は自然の一部 (*pars naturae*)である²⁾」と言っている。しかも、ここで言う人間とは全ての人間のことである。つまり「人間は賢者であろうが無知なる者であろうが、自然の一部であるのだ」(TP/II/5)。ただ、民衆や無知なる者は、人間を自然の中で、

中心的特權的存在と考えて、自分達に（共通の自然の法則や必然性から独立した）自由意志があると考えているのだ³⁾。だがこのように全ての人間が自然の一部であることによって、無知なる者にも救済が準備されていることになる。

II コナトゥスと活動力能の関係

通常、活動力能 (*potentia agendi*) は大きくなるとか小さくなるとか言われるが、「コナトゥスが大きくなる」とは言われない。しかし既にコナトゥスを規定した第3部定理7の証明に「各々のものが、それによって、自己の存在に固執しようと努力する力能あるいはコナトゥス」と述べられ（III/54D, 57D, cf. III/28D, IV/8D）、それを論拠にして第3部定理37証明で、活動力能をコナトゥスと言い換えたり、第3部定理55系の証明で「人間の活動力能あるいはコナトゥス」と言われるなどスピノザは、コナトゥスと力能ないし活動力能を同一視しているかに見える。そして至る所で、力能や活動力能の増減については明言し、問題にもしているから、仮に<コナトゥス=力能ないし活動力能>であるならば、「コナトゥスが大きくなる」ということも当然考えられることになる。だが果たして、コナトゥスと力能あるいは活動力能は⁴⁾ 厳密に等しいものなのか。これは非常に纖細な問題だが、少なくとも第4部定理4の証明に見られるコナトゥスと力能の関係からは、厳密な意味でのコナトゥスと力能ないし活動力能の同一性は存在しないことが分かる⁵⁾。ではこのように、厳密には同一ではあり得ないコナトゥスと力能ないし活動力能が並列に並べて用いられたり、前者が後者で言い換えられたり、代用されたりすること⁶⁾ には矛盾はないのか。ここでは、スピノザがコナトゥスと力能あるいは活動力能をあまり厳密に区別せずに、ある程度の互換性を持たせて使用していると考えるよりはむしろ、スピノザにおけるコナトゥスには活動力能を始め、幾つかの位

相が存在していると考えるのが妥当なのではなかろうか。というのも、コナトゥスそのものは、たとえ直観知によっても具体的には捉える事はできず、次章に示すような現実生活の様々な位相において、様々な形で現実的に現れた<限りにおけるコナトゥス>としてのみ、初めてその大きさや強さを捉えることが可能になるようなものだと考えられるからだ。絶対に無限なる神から授かったものとしてのコナトゥスは、有限様態のうちでは、神の永遠で無限な力のそのような痕跡としてしか姿を現さないのでないのだろうか。

III コナトゥスの位相

本章では以下の様々な位相（①～⑥）において現れた<限りにおけるコナトゥス (conatus quatenus)>⁷⁾ を考察することによって、各々の位相において「コナトゥスが大きくなる」という事態が在り得ることを示す。

① 神（自然）の無限なる力能は、人間においては、その現実的本質であるコナトゥスによって、様態的次元で再構成（表現・展開）される時に、初めて我々自身の現実の実効的な力や力能つまり活動力能となる（IV/4D, 26D）。よってこの再構成の行われ方次第で、その人間の持つ力能や活動力能の大きさや性質も変わってくる。神の永遠で無限なる力能を出来る限り損なわないような再構成をそのコナトゥスが行った時、その人間は、自身にとっての最大限（最高度）の活動力能を発揮することになるのだ。このように、活動力能は各人のコナトゥスの反映であり、各人の力能や活動力能として現実化された<限りにおけるコナトゥス>には当然、増減が考えられる。

② コナトゥスは人間の「感情」という位相においては、「欲望」として現れるが⁸⁾、この「欲望」には増減が認められるから（III/37•D, 57D）、「欲望」として人間の感情に現れた<限りにおけるコナトゥス>にも当然、増

減が考えられる。スピノザによると「喜び」、「悲しみ」、「欲望」が基礎的三感情であるが、「喜び」とは、人間の自己保存のコナトゥス、活動力能、「欲望」を増大・促進させ⁹⁾、人間を「より大きな完全性へと移行」させる受動（感情）であり、「悲しみ」とはコナトゥス、活動力能、「欲望」を減少・阻害させ、人間を「より小さな完全性へと移行」させる受動（感情）である¹⁰⁾。ここで留意すべきは、彼が、活動力能を完全性との関連で捉え直して、活動力能（コナトゥス）の増減を「より大きなあるいはより小さな完全性への移行」と対応させて考えた時（III/11・S, Ad3Ex, IV/Pr, 59D）、それが基礎的三感情の定義ともあいまって、コナトゥス、活動力能、完全性そして「人間の感情」の間に、極めて倫理的な色彩を帯びた統一的な説明の登場をもたらしたことである（IV/Pr）。

③ 人間におけるコナトゥスは、単に自己の存在を最低限、維持・保存するに留まらず、自己のコナトゥス（活動力能、欲望）を増大・促進せるものつまり「喜び」をもたらすものを、その大きさに応じた（比例した）コナトゥスによって可能な限り維持し増大させようと努め（conatur）、自己のコナトゥスを減少・阻害せるもの、つまり「悲しみ」をもたらすものを、その大きさに応じたコナトゥスによって可能な限り除去しようと努める（III/12,13,28,37D）。感情という位相において新たに生じるこのようなくメタ・コナトゥスは、他者に対する「愛」や「憎しみ」についても全く同様に適用される（III/37D, 43D, 25, 26）。この<メタ・コナトゥス>が増減するのは示した通りだ。

④ 人間の「認識」という位相においてコナトゥスは重要な役割を担って現れる。スピノザによると、精神の力能は唯、（十全な）認識によってのみ定義され、精神の活動力能とは認識能力のことである（III/59D, V/Pr）。そして、受動感情はそれを明瞭判然に認識すれば、直ちに受動感情ではなくなり、精神は万物を必然的なものとして認識する限り、感情に対し

てより大きな力能を持ち、感情から働きを受ける事(pati) もより少なくなるのだ (V/3,6)。認識のみが感情を（絶対的ではないまでも）抑えることのできる治療法である (V/Pr)。このように我々は(十全に)「認識する限りにおいてのみ働きをなす (agimus)」(IV/24D) ことができ、受動〔感情〕(passio) への隸属を脱して能動〔感情〕(actio) へと移行できる。この「認識すること」をスピノザは<精神のコナトゥス>として位置付けた。「理性的に思惟する限りにおける精神が、それによって自己の存在を保持しようと努力するこの精神のコナトゥスは認識することに他ならない」(IV/26D) のだ。だから、精神の受動を生み出す「想像知(imaginatio)」から精神の能動を生み出す「理性的認識」へ (II/40S2,41・D, III/1,3)、そして「神への知的愛」によって至福を成就する「直観知(scientia intuitiva)」へと¹¹⁾ 認識能力が向上して行く過程は、<精神のコナトゥス(活動力能)>が大きくなる過程として考えられる。そして「悲しみ」によって、精神の認識能力(活動力能)は減少・阻害されるから (III/59D)、その時、<精神のコナトゥス>も減少するのである。こうして、認識能力として現れた<限りにおけるコナトゥス>は増減するということが確認された。ただ留意すべきは、②で見たように、スピノザは活動力能とコナトゥスの増大を「より大きな完全性への移行」と同義に考えているから、この受動から能動へと向かう認識能力(精神のコナトゥス)の向上も、精神の「より大きな完全性への移行」として捉えられる (III/Agd, IV/59D) ということだ。認識能力がこのように理解される時、認識というものは、少数の賢者のみが厳しい知的修業を通じて到達したり、あるいは、いきなり神秘的な直観で到達できるような精神の営みではなく、広がりと重(多)層性と柔軟性を併せ持ち、尚且つ「より完全な認識へ」と向かって行く移行(transitio) という運動性を持ったものになったのではなかろうか。「想像知」、「理性」そして「直観知」といった固定的に厳密に区分された三つの認識のヒ

エラルヒーが在るのではなく、「喜び」や「欲望」といった我々のコナトゥスを増大し高めてくれる感情に導かれつつその一層の拡大を目論み、より低い受動の場からより高い受動の場へと、そして更により高い能動へと移行して行くというこの認識の運動性を一貫して支えて、その底流となっているのが＜精神のコナトゥス＞であるのだ（III/P9）¹²⁾。

⑤ 「倫理」という位相において、コナトゥスは中心的な位置にあり、重要な機能を發揮する。スピノザは「善」を、我々の「人間本性の典型」にますます接近して行く手段になり得るものと解するが、この「人間本性の典型への接近」を「より小さな完全性からより大きな完全性への移行」と「活動力能の増大」と同義に考えている（IV/Pr）。ここから「善」は、我々に有益であるもの、つまり「喜び」の原因となり、自己保存に役立ち、活動力能（コナトゥス）を増大・促進させるものであり、「惡」はその逆のものであると規定される（IV/D1,2, 8D, 29D）。そして、いかなる「徳」も「自己保存のコナトゥス」以前には考えられず、このコナトゥスこそが「徳」の第一かつ唯一の基礎であり（IV/22・D・C）、人間は「自己の利益を追求する事に、言い換えれば、自己の存在を保持する事により多く努力し（conatur）、且つより多くそれを為し得るに従って、それだけより大きな徳を備えている」（IV/20）のだ。このように、コナトゥスに照らし出されてのみ倫理は生じ得る。そして、「善」や「惡」や「徳」といった倫理の位相において、この倫理の中心的基軸（基準）として現れたく限りにおけるコナトゥス>にも増減が認められるのだ。

⑥ 「社会（関係）」という位相において、コナトゥスは「自然権（jus naturae）」として現れる。スピノザによると「自然権」は「万物がそれに従って生じる自然の諸法則あるいは諸規則そのもの、即ち自然の力能そのもの」であり、それ故に「各個物の自然権は、その物の力能が及ぶ所まで及ぶ」（TP/II/4）のだ。ここから分かるようにスピノザは「自然権」を人

間だけでなく万物に認める。従って、自然物の一つである国家(TP/IV/4)にも「自然権」を認めた(TP/III/2)。そして「自然権」と自然の力能を等置し、権利と力を同一視してそこから、力関係によって権利関係を規定した。よって、個人間であれ、臣民と国家の間であれ、国家間であれ、相手に対して持つことができる力の増減が、そのまま相手に対する権利の増減となる。だから「各々の国民あるいは臣民は、国家そのものが彼らより強力であればあるだけ、それだけ少なく権利を持つ」(TP/III/2)のだ。このように、個人(臣民)のであれ、国家のであれ、「自然権」は力の増減に応じて大きくなったり小さくなったりする。だがここで彼は「自然権」を〈自己保存のコナトゥス〉によって定義するから(TP/II/5, cf. TP/III/18)、社会という位相において「自然権」として現れたく限りにおけるコナトゥス>にも増減が認められるのだ。

以上で、様々な位相(①～⑥)において現れたく限りにおけるコナトゥス>は「大きくなり得る」ということが示された。

IV コナトゥスの度合いと機能

各個体間、各個人間にはコナトゥスの差異(度合いの相違)が在るのだろうか。在るとすればその意義とは何なのか。スピノザは、何故神は全ての人を理性の導きによってのみ行動するように創造しなかったのかという問いに「神には完全性の最高の度合いから最低の度合い(gradus)に至るまでの全てのものを創造する素材が欠けていなかったからだ」(I/Ap)と答える。更に「全ての個体は度合いの差こそあれ精神を有して(靈化されて)いる」とし、そこから一つの精神が他方に対して優秀性を持つという事態が生じると述べるが(II/13S)、これは各人、各個体間の「コナトゥスの度合い」の相違のことであると理解できる。確かに自然(神)の無限なる力と活動力能は至る所、常に同一である(III/Pr)。しかし各人の現実的

本質であるコナトゥスは同一ではない（III/57・D）から、コナトゥスを通して現実化された活動力能にも当然、各人によって差異が現れる。だから、自然の力が至る所、同一であることと各人の活動力能として現れた〈限りにおけるコナトゥス〉に差異が在ることは矛盾しない。全てのものが「同等」だと言われるのは、外部の原因によって滅ぼされない限りは、それが存在し始めたのと同一の力をもって常に存在に固執することができるという条件、つまりコナトゥスが神から「与えられた本質」として万物に内在しているという条件の平等に過ぎない（III/8・D, IV/Pr）。このように各人、各個体間のコナトゥスに差異が在るのが事実だとしても、それらを比較して「それ自体で考えれば」或る度合いにおいては完全なものの中に「欠如」を見出して、それを不完全なものと呼び、完全であると想定するものとの間に価値のヒエラルヒーを適用することは批判されねばならないのだ。スピノザは「完全」や「不完全」や「欠如」は比較によって生じる思惟の様態であり想像力の産物に過ぎないとして、自然の中に「完全」や「不完全」といった差異を持ち込むことを戒める。しかし、神の摂理（決定）を認識するまでに〈精神のコナトゥス〉が上昇していない多くの無知なる者、民衆にも倫理的な生活と救済は保証されねばならない。そこで彼は、一度却下した完全・不完全、そしてそれらと同じく比較から生じる相関概念に過ぎない善・悪をそのまま——それらの相対性を極めてうまく生かしつつ——彼の倫理学の中に導入した（IV/Pr, EP/19,21）。前章⑤で見たように「人間本性の典型」が比較によってしか考えられない「完全性」との対応関係で捉えられた時、それは厳格で絶対的な固定化された基準や要請ではなく、緩やかで柔軟で重層的な一応の目安という新たな意味を持つようになった。それは完全な人間か不完全な人間かの二者択一的なものではなく、様々な状況に置かれて生きている現実のどの人間にとっても到達（移行）可能な「より大きな完全性」なのだ。だが、それは我々がいくらそこへ到

達したと思っても、常に相対化されて彼方へと自己を現すようなものもある。そして、それでいながらたとえほんの僅かで他人の目には見えない程の移行であっても、それが「より小さな完全性からより大きな完全性への移行」さえあれば、やはり、〈より大きな完全性と人間本性の典型への移行・接近〉なのだ。しかし、我々は自己に与えられた現実的本質（コナトゥス）の或る一定の度合いの範囲の中でのみより大きな完全性へと移行できるのであり、この度合いの範囲を越えて移行すること——例えば動物が人間に変化する場合のように——つまり「他の本質ないし形相に変化する」ことはあり得ない。「度合い」といっても、それは各々のあくまで（現実的）本質の度合いであるからだ。逆に言えば、この度合いの範囲の中で自己の活動力能が増大すれば、それが〈より大きな完全性と人間本性の典型への移行・接近〉になる（IV/Pr）。自己の「コナトゥスの度合い」の範囲を越えた他者と比較して自分を卑下することも、倫理的目標を高く掲げ過ぎて挫折することもない。「より小さな惡は実は善である」（IV/65D）ように、以前の自分より少しでも「より大きな完全性へ移行」していれば、それに満足できるのだ（III/57S, IV/Ap32）。だが、精神が完全性そのものを所有する「至福」はその遙か彼方に在る（V/33S, 36S, 42D・S）のだ。

エゴイスティックに自己保存と自己の利益のみを考え、他者を顧慮せず相互に敵対している人間は〈精神のコナトゥス〉による受動から能動への移行を成し遂げていない人間である（IV/32・33・34）。〈精神のコナトゥス〉である認識能力が、受動しか生まない「想像知」を脱して「理性」による認識にまで向上している者は、能動的に生きており理性の導きに従って生きることが可能なのだ。この〈理性の導きに従って生きる人間〉は本性上常に必然的に一致する。彼等は自分のために求める善を他人のためにも求める。彼等は自由な人間であり、最も深い友情で結ばれ、愛によってお互に親切にし感謝し合う。憎しみや怒りには愛や「寛仁」で報いる（IV/35,

37,46,66S, 71・D)。人間は現実的本質としてのコナトゥス（欲望）が相違する故に互いに対立するのも事実だが、憎しみ合いや敵対を越えて他者との間に絆を結ぶ可能性も与えられている。この可能性を保証してくれるものこそが、コナトゥスとその上昇なのだ。このようにコナトゥスには利他的側面もあり〈コナトゥスの倫理的機能〉と呼ぶべきものが備わっている。そして〈理性の導きに従って生きる人間〉は孤独よりも国家の共同の決定（法律）に従ってより自由に生きることを欲する（IV/73・D）。〈理性の命令としてのコナトゥス〉（IV/18S～37S1）が要求するのは、他者との協同そして究極的には国家の形成なのだ。実は注意深く見ると「各々のものが単独であるいは他のものと共にすることを為し、あるいは為そうと努める力能ないしコナトゥス、言い換えれば、各々のものが自己の存在に固執しようと努める力能ないしコナトゥス」（III/7D）というようにコナトゥスには定義から既に他者との協同が内包されているのだ。これらは〈コナトゥスの社会的機能〉とでも呼ぶべきものだ。だから、コナトゥスは自己の存在への我執であり、利己主義的、個人主義的で倫理的には諸悪の根源だからその彼方へと越えて行くべきものであると批判する者は¹³⁾、コナトゥスの真骨頂を見ていかない。コナトゥスこそが、有限様態である人間が無限なる神と繋がっていることの証しであり、有限なるもののうちに絶対に無限なる神の痕跡を見出す唯一の手がかりであるのだ。又、コナトゥスは他者との係わり、協同、協調がまさに倫理として要請される場であり、むしろコナトゥスによって、人間の存在の中心性や特権性は否定され、自己はその存在の始源から無傷の統一性など持っていないことが示されるのだ。有限なるものは、他者（有限であれ無限であれ）なしには存在し始め、存在を持続し、そして救済に辿り着くことはできない。このコナトゥスとその上昇にこそ、有限様態としての人間の現存と救済の根拠が在るのである。

注

スピノザのテキストはゲーブハルト版全集を用いた。略例は以下の通りである。

(IV/Pr) = 『エチカ』第4部序言。(TP/II/4) = 『政治論』第2章第4節。

(TTP/IV/44) = 『神学政治論』第4章44頁。(EP/19) = 『往復書簡集』第19書簡。

- 1) Deleuze,G., *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit, 1968, P12. スピノザでは「説明すること」は「表現すること」の一側面である。
- 2) (IV/2,4,57S, Ap6・7・32), (TP/II/5・8), (TTP/III/32, IV/44, XVI/191)
- 3) (I/32, Ap, II/35S, 48), (TP/II/6), (TTP/IV/68), (EP/58)
- 4) (III/Pr, 37D, 57D, IV/8D) 力能と活動力能は同一視されていると考える。
- 5) 「——人間の現実的本質によって説明され得る限りにおける神あるいは自然の力能そのものである（第3部定理7より）。故に、人間の力能は、それが人間自身の現実的本質によって説明される限り——」(IV/4D)
人間はあくまで、自己の現実的本質(コナトゥス)によって、神(自然)なり自己なりの力能を説明(表現)し展開させるのであり、ここからは厳密な意味でのコナトゥスと力能(活動力能)の同一性も互換性も存在しないと結論できる。
- 6) コナトゥスという言葉を完全に省いて、「それによって、自己の存在を保持する力能」(IV/4D, cf. IV/5D)と述べられ、更には「それによって、存在に固執する力(vis)」(II/45S, IV/3, cf. IV/26D)とさえ述べられている。
- 7) ドゥルーズも“conatus en tant que”という表現をしているが、意識的ではないようだ。Deleuze, G., op. cit., p.211.
- 8) (III/9S, Ad1EX, IV/18D, 21D, 59D, Ap1)
- 9) (III/57D) 自己保存のコナトゥスが増大することを明記した唯一の箇所。
- 10) (III/11S, 37・D, 57D, cf. III/55CD, Ad2・3)
- 11) (IV/Ap4, V/32C, 36S, cf. II/49S)
- 12) Harris, E.E., *Salvation from Despair*, Nijhoff, 1973, p.240.
- 13) cf. Levinas, E., *Dieu, la Mort et le Temps*, Grasset, 1993, pp.31, 38-39.

付記 本稿は「平成9年度文部省科学研究補助金（特別研究員奨励費）による研究成果」の一部である。

(大学院後期課程学生・日本学術振興会特別研究員)